

悉讀過焉。老莊之衆家、審其得失、攷其異同、以得其要旨、而管晏、列文、關尹、鶡冠、鬼谷子、華、楊、墨、荀、卿、申、商、韓、呂、淮南、揚子等諸子、皆披囑而區別之、蚤讀蘇黃集、知其語脈、乃閱李、杜、韓、柳、迺誦楚辭、文選、而歷代件件之類集、各家之別集、任所有以該觀之、風雅之正、騷賦之變、古文、古詩、樂府、四六、散文、律體、長短之製、大膽放心之分、五七雜言之品、世風之不一、樣家法之無同途、凡文也、詩也、之錄、則筌式、辨法、評品格、眼話談、大搜尋之、而得之心、應之手、高步于文壇、雄揚于詩場、○中幕下之士、阿部正之、一日邂逅、語杏庵正意曰、聞今時博物者、羅山子、而其次之者、足下也、吁、難得之才也、正意答曰、羅山則誠然矣、以彼文學生于方今之日域、而不得展布也、甚可惜焉、吾儕十餘輩、雖累之、而豈望一羅山乎、匪所以可侔稱之、正之曰、予固不學、無所辨、知今聞所告、彌知羅山之不可跂及也、足下之直說、不夸不耀、最可感讚也、○灰聞元和年中、大明福州人、單鳳翔適來、京師、想先生風采、頗稱可之、竟永甲子、丙子、朝鮮專使之不能答、先生之間條者、有所素聞、其洽才、而且無違于當務之多事耶、癸未之聘使、欲修交誼、而不遂矣、進士朴安期、一見筆語曰、不佞在海東、聞羅山之名久矣、而後詞札往復、推之爲老先生、且逢此方之畫手、圖其肖影、請先生爲之贊、携歸以爲榮、

〔有德院殿御實紀附錄〕十世家の元老を重んぜらるゝみこゝろとりなりし中にも、信篤とし老て、まばく召を蒙り、時めくありさまをにくめるにや、ある時、近習の人々、御前にて物語しける次で、一人申けるは、このほどある人、信篤に中の字を書て尋ねしに、しらすと申したり、さらばとて細井次郎大夫知慎に問しに、これは衆字の省畫にして、もろこしにて俗用する字なりと答へたり、知慎の博物、信篤が及ぶ所ならずと、世に申しはやすなりといふを聞せ玉ひ、いやとよ、左にあらず、信篤が學は、よき衣服を商ふ人のごとし、常に錦繡のたぐひのみ見なれたれば、木綿紬のごときものには、目もつかざるべし、省文の俗字をまらすとて、笑ふべきにあらずと仰あり、これより近臣等、信篤を誹るものなかりしとなむ。